



保健室は寝る所じゃない

「歩きスマホはダメだぞ」

「は、はい！すいません！」

「やっぱこええな鉄仮面。。。」

「美人だけど匠がすげえんだよな」

「。。。」

新任の保険室の先生  
一切笑わず  
威圧的な雰囲気から

『鉄仮面の女』  
ってあだ名が付いた

でも多くの生徒にとって  
あの先生が怖いだけで  
困る事は無い

保健室なんて大半の生徒は  
利用しないからだ

困るのは今まで  
よく利用してた奴

俺とか

「ダメに決まってるだろ」

「うう・・・そこを何とか  
バイトですげー疲れてんすよ」

俺はよく保健室に寝に来てた

前の先生は適当で  
空いてるベットがあるなら  
勝手に寝ても何も言わなかった

「はあ・・・学生の仕事は勉強だろっ」



「それはそうなんすけど」

「なのにバイトで疲れて勉強できないなんて」

「まぬけとしか  
言いようがないぞ」  
「むっ」

この時は疲れてて  
あまり頭が動かないし  
少しイライラしてたのかも



「大人になってから  
好きなだけ働けばいい」

俺だってそれなりに  
真面目にバイトしてんのに

「とにかく授業に戻るんだ」

大人ならいいんだろ  
よーし・・・



「ここはだいたいぶ大人だと思うんですけど」

「.....」

チャックを下ろして  
アレを見せつけてやった

どーだビビったたる  
デカさには自信ある

若そうだし意外とこういうの  
苦手だったりするんじゃないか？



「ふうん、なるほどな  
キミの言い分はわかった」  
そう言いながら  
一度保健室から出て行って

そしてドアの表札を  
『先生不在』に切り替え  
戻ってきてドアにカギをかけた



「これで他の生徒は来ない」

思ってた展開とだいぶ違うけど

「……あの、それで  
寝ていいんすかね？」

「ああもちろんだ」



「や、やったー」

「どれだけ大人か  
見てやるうじやないか」  
「わーい・・・え？」

「生意気にも  
そんなモノで  
私が怯えるなどでも  
考えたのだろう？」

雲行きが怪しくなってきた・・・

「私への挑戦と受け取った  
さあ寝るんだ」



どうしてこんな事に。。。





めっちゃ出た。。。。  
すごい気持ち良かった

ズブズブ

「ん？これで終わりか？  
案外。。。」

「こ、こんなもじゃ  
全然足りないっすけどー！」







「ふむ……」

びびる……

はあ……はあ……  
全然顔色が変わらねえ

「ではここからは  
私がやるとしよう」

「はあ……えっ」



「あれゝまだ締まってる」  
「保健室に用事あるの？」

「指切っちゃったから  
バンソーコーー欲しいんだけど  
朝から先生不在なんだよねゝ」

「部室にあるから  
分けてあげるよ」

「ほんと？助かるゝ」





「さすがにこれだけすると  
出る量も少なくなったな」

ドクドク

グググ

「もう無理っす。。。すみません」



「これに懲りたら  
あまり大人を舐めないように」

「うぐぐぐ……」

俺は逃げるように  
保健室から出た

「彼も反省して  
二度と来ないだろう」



全くオナニーする気になれなかった  
あんな絞られたせいだ

思い出すと  
すごい気持ち良かったけど  
同時にすごい敗北感を思い出す

くっそお

舐められっぱなしは嫌だ

「・・・今日も来たのか？」  
「リベンジしに来ました！」

全然反省してないな

「・・・ふう、わかった  
なら気が済むまで相手する」

余裕ぶりやがってえ〜



実はすでに  
仕込みは済んでいる

先生はいつもお茶を飲む

そして使うお湯は  
この部屋の電気ポットだ

そこにさつき

ネットで購入した  
超強い精力剤を  
こっそり入れておいた

・・・よし飲んだぞ  
これでやれば喘ぎまくりよ



「ところでお茶飲むか？」  
「あっどうもっす」

・・・あれ？  
つい流れて飲んだけど

これ俺まで  
ヤバイ事になるんじや

「どうしたんだ？  
やるのかいやらないのかい」

「や、やるよー！」





.....?

アッ  
アッ  
アッ

アッ  
アッ  
アッ

アッ  
アッ  
アッ

アッ  
アッ



気のせいだろうか・・・

ズドゥン

ふ

?

少し心地良かったような



さつきから身体がおかしい

ん

「.....んう」

なんだ今の声は？私のか？

んう...















「あの、先生もしかして」

「……調子に乗るんじゃない」

ん

ブル

……や、やったぞ！  
ついにあの冷徹な女を  
俺のチンポでイかせてやった！！！！

ブル

ん

ん



この後も調子に乗って  
何度もイかせたし  
俺も出しまくって満足した

だけど

「これで終わるのは許さない  
明日また来なさい」

そう言われて

翌日も行く事になり

そんなやりとりが何日も続いた



放課後家に呼び出された

「……しようがないだろ」

「あのまま保健室で  
行為を続けていれば  
いずれ誰かにバレてしまう」



「だがここなら  
邪魔は入らないし  
時間に縛られる事も無い……」

「ずいぶんかかったが  
今日こそは反省してもらおうぞ」



とは言ったものの  
。。。。やはりダメだ

もうどこが良いか  
全部バレてしまっている

必死に声を出さないように  
我慢しても。。。。

ズ  
ズ  
ズ



タピッ

タピッ

タピッ

ズ  
ズ  
ズ



「イキましたよね」

「いって……ない……」  
「どれだけ強がった所で」

ズンズンズン……

ガクガク

ズン

はぁー！  
はぁー！

んんん

んんん

カクカク  
カクカク

繋がっていても  
簡単に伝わってるはずだ……









数時間後

外はすっかり  
暗くなってしまった

んんん...

んんん...

ズンズン

止める気配がない  
いや、それより...

グニ

グニ

ズンズン

グニ





奥に押し込むように  
射精しながらまだ動いている

はあ.....♡

あ.....♡  
はあ.....♡

今日は危険日だと  
あれほど伝えたのに

妊娠しないかと思っ  
ているのか？

アッ

アッ

グッ

アッ.....  
アッ.....



「そういえば聞いた？」  
「何が」

「保険室の先生  
また代わるんだって」  
「マジ？」

「そういえば  
最近ずっと保健室に  
いなかったものね  
なんかあったの？」

「他の教師と喧嘩して  
学校に居づらくなったとか

誰かと隠れて付き合ってた  
それがバレちゃったとか

そんな話を友達の子が  
言ってたって噂聞いたよ」

「ええ、何その話  
絶対嘘じゃんそれ」  
「あはは、だよな」





「こんな事になるとは・・・」

ふー♡

ん♡  
ん♡

ドゥン♡

自分でも気づかぬうちに  
この関係に夢中になってしまった



うーむ困った

「。。。」

「ん？どうしたんだ？」

「元々私がムキになって起きた事だ  
キミは気にする必要は。。。」

「あの、これ」



「なんだこれは？指輪？」

「バイトの貯金全部使って  
買ってきましたただと？」

わんわん

わんわん

？

「・・・やっぱり  
キミは生意気だな」

おしまい













































































































